

見た・聞いた・考えた

― 北欧の福祉・教育を考える旅から ―

〈寄稿〉 全障研事務局長 蘭部 英夫さん

第2回 福祉の思想

今年の1月、父を看取った。78歳。2006年に脳梗塞で倒れ、片マヒに。「字が書きたい」願いは懸命のリハビリで叶うも、昨年春頃から衰えがすすみ、お盆すぎには一人で立ち上がれなくなった。秋からは、30キロエリアで唯一空きのあった介護型療養病院で過ごしていた。

障害者権利条約実現の牽引者IIドンマツケイ議長は、「平均寿命70歳を越える国の人々は、平均8年間、人生の11.5%は障害をもちながら過ごす」と言う。日本の場合、そのうちの要介護期間は男1.5年、女3年だ。これは長いのか短いのか・・・。

いずれにしても、誰もが生まれてから死ぬまで、誰かに支えられ、誰かを支える。けっして一人ではない「お互いさま」の関係がある。ところが、3・11以前にすでに社会保障

大「改革」は消費税前提にアケセル全開だ。推進室長は、障害者自立支援法で「福祉は買うもの」「それが新しい福祉の考え方」と国会で豪語した中村秀一社会・援護局長(当時)だ。今度のドジョウ首相も増税命!だ。

障害は「自己責任」。「トイレに行く、外出するなど日常

写真2 一階の生活支援センター



行為を支援すること」は「私益」。だから「利用料」は払って当然。扶養は家族に義務がある。この考えのもとに制定された障害者自立支援法は、猛烈な反対運動と世論によって否定され、違憲訴訟団は「基本合意」を政府と交わした。社会的な困難は、個人や家族の責任ではなく、社会全体で支えるのだ。

*

北欧・デンマーク(人口550万)では、精神障害のある人は約50万人、総人口の15%はなんらかのうつ症状を抱えているという。予想外に比率が高いのは治療費が無料

なので受診者が増えるためだそう。

昨春秋、人口4万の町のグループホーム+生活支援センターを訪ねた。町中の静かな共同住宅群のなかにある3階建て12戸の素敵なアパート(写真1)だった。

1階の生活支援センター(写真2)のスタッフは5人(作業療法士、社会生活指導員など)すべて自治体の職員だ。週4日は2人で、週末は1人で支援している。医師や看護師と連携して仕事していると話していた。

グループホームの住人、ハンス(写真3)が、自分の部屋を案内してくれた。シックなトーンのおちつく部屋だ。棚の上に子どもたちの笑っている写真が飾ってあるのを見た。

「その写真は、ぼくが支援(II里親)してるナミビアの子どもたちだよ。今は手紙だけのやりとりだけど、いつかどこかで会えたらとても嬉しい」

ハンスは、この町で、なかなかまとちとおだやかに暮らし、今の地球にともに生きていることを学び、自分で考え、南西アフリカの子どもたちの支援を実践している。彼の障害

者年金は年約300万円。驚いたのは額面だけではない。障害のない人たちの失業保険と同額が当たり前のこととして保障されていることだった。

写真3 ハンスと彼の部屋



蘭部さんの著書

全障研出版部
1700円+税

北欧 考える旅
福祉・教育・障害者・人生

